
パセリとアリス

sur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パセリとアリス

【Nコード】

N9230H

【作者名】

sur

【あらすじ】

アリスはどこにでもいる変わった女子高生。現代の日本の国で生まれた彼女は、どう生きて何を感じて過ごしていくのか。迫りくる未来と追いかけてくる過去の板挟みにあいながら生活を送る普通の女子高生のある時期の生き方や考え方を描いた短編作品。

この”まとも”な世の中で変人ぶっている私の発言。

「私ってやればできるの。将来は何か才能を発揮して、テレビに出たり、何かサイン会を開いたり。まあ、やりたいことをやって暮らせればそれでいいの。別に有名になりたいってわけじゃないし。人とはちよつと違うものとかでさ、求められればいいよ。」

友人の健一に何一つ具体性のないぼんやりとした自分の将来像を話す今年で18歳になる私。期間限定である女子高生という名のブランドを持っている。これがあるからとりあえず私は輝いていられるのだ。このブランドの威力はとにかく凄い。下心が丸見えな男どもが手を伸ばして求めるブランドネーム。親が大切に何年もかけて育ててきたこの製品を妄想の中で汚され、それでも上手く利用していけばあまり不自由をせず暮らしていける。そんな女子高生な私。

「アリス。この受験生という大切な時期にさ、そんな曖昧な夢を見るのもどうよ。別にいいんだけどさ、世の中の同じ年代の奴で何も考えずに大学行く奴だっているわけだし。やりたいこと決まってる奴なんて実際ほとんどいないって。だからとりあえずさ、勉強をして、大学に行ってみるって。夢を見ると朝起きた時に辛いことになるぞ。ああ、これは夢だったんだなって。」

健一は私を世の中の駄目な若者の代表に仕立て上げて諭す。もちろん、健一の発言が至極まともで正しいのだし、私も言った後で、これはドロドロの甘ったるい発言だなあ。と思ったりした。

そもそも、こんなアリスだなんて不思議の国に迷い込んでしまっ

た痛々しい女の子みたいな名前を付けた親が悪いのではないか。こんな名前だから私自身、不思議な世界へ迷い込もうとしているのではないか。もしかしたら帰りに時計を持ったウサギが電信柱の影に隠れて何も考えずにボヤボヤと妄想にふけっている私を待ち構えているかもしれない。そして私を穴へと陥れて変な世界へ連れ込み、物が大きく見えたり私の背が縮んだりと主観的なイメージを狂わせ、結局最後は君が勝手に見た夢だったんだよ。ということにするのかもしれない。ねえ、結局そのあとでお話の中のアリスは幸せになったのだろうか。あなたは知ってる？

「とりあえず、勉強が辛いならひとまず休んでみればいいんじゃない。気晴らしにさ。おまえは毎日遅刻もせずに学校へ来てたわけだからさ。少しぐらい休んだって誰も文句なんて言わないよ。」

この健一の提案に世の中の駄目な若者の代表である私は乗ってみた。

「健一君、あなたもどうせこの受験戦争のライバルを一人でも減らしたいのね。でも、こうやって孤立しがちな私の話を聞いてなじつてくれる健一君のことを私は愛おしい。」そのような意味のことを伝えた瞬間の健一の怯みつつも呆れたような顔と周りの女子高生の爆笑する声を私は一生忘れないだろう。

帰り道、いつものように一人で帰る私。踏切の前に立つ。あと一歩を踏み出せば確実に世界が終る。しかし、そのような行為をする気は毛頭無い。しかし、頭の中でそのイメージがよぎる。別に終わってもいいな。と考える私。私たちはゆっくり時間をかけて死んでいく。人生の全ての時間を使って死に方を選んで、数多の数えきれない分岐を超え夢で見た街へとたどり着き、捨てられた平原に立つ人を祝うかのように人は死んでいく。死んだ人を送る儀式を行う。

人生の選択の中で私は幾つの道を失くしてきたのか、幾つの選択を越えてきたのか、その結果は正しかったのか。以前に健一に話したことがある。人はゆっくりゆっくり、だんだん食べ物や夢を減らし、死んでいくのではないか。それが人生なのではないかと。

そしたら健一は「それはただのペシミズムだ。要するに世の中の悲しい部分や辛い部分、寂しくて暗い部分だけを上手に切り取って自分で味わっているだけだよ。世の中にはもつと明るくて眩しいものがある。時期が来れば分かるさ。そんな悲観的な考えはやめた方がいい。」

私は思う。この世の中のペシミズムではない人間はただの馬鹿どもだ。

私は踏切を超え、商店街を抜ける。途中にある花屋に惹かれ、店の先にある色も原産国も大きさも全てがバラバラで統制がとれていない花束たちを見つめる。そこで、ある一つの苗が気になり店員に尋ねてみる。

「あつ、この苗に植えてある緑の草ってなんですか。すごいパセリに似てますよね。」

作業をしていた花屋はこちらの顔を覗きこみ、少し微笑みながら「これはパセリですよ。今じゃ種や苗を買って育てる人が多いんです。もちろん食用としてもお使いいただけますよ。」

私は、自分の生まれた国はパセリを好き好んで育てる奴がいるほどお金や時間が余ってる大人が多い国なのかと感傷に浸り、その間呆けていた私を店員はどこか気分でも悪いのではないかという顔つきで戸惑いながら見ていた。それに気づいた私は慌てて礼を言い、家への道を走って帰った。

家に帰ると母はすでに買い物から帰宅していて私に世間話を投げかけてきた。

「アリスちゃんお帰り。いつも早いのね。受験生だから勉強しなきゃいけないんだろうけど、たまには遊んでできていいのよ。」

お母さん、私は友達が全然いないので放課後にみんなで楽しく遊ぶという青春三大イベントと一緒に言う相手がいないのです。しかも決して勉強をするために早く帰ってきている訳ではなく、最近は何部屋でござろころと聖 お兄さんという漫画を読んでいるのです。なんてことは言えずに「やっぱりいい大学に行きたいからね」と私は平気で母親に嘘をつく。だって嘘をつかない人間なんていないし。世の中が全て正直だったなら、それは死んだような世界なんじゃないかなあ。と漠然と思う。

「アリスちゃんは理想が高くていいわね。あつ、そうそう。今日は吉村のおばさんに野菜の種をもらったのよ。イスラエルに行った時のお土産らしいんだけど、あの人ってセンスないわよねえ。野菜の種をもらって喜ぶ人なんかいるのかしら。」と、母はいつものようにご近所さんの愚痴を言う。

「野菜って何の野菜なのっ。もしかしたら珍しい野菜の種かもしれないじゃん。」

そう言っってイスラエルの地で村上さんのセンスによって選ばれたお土産である野菜の種を母の手からひったくり、パッケージに写された野菜の写真を見る。そして驚愕する。

「……………パセリ。」

先ほど花屋で見たそれと全く一緒の植物だった。厳密には少し違うのかもしれないが、わざわざそんなパセリの細かい違いを見分けられるほど私は好き者じゃない。とりあえず、私は母からそのパセリの扱いを任されたので苗に植え自分の部屋に置いてみることにした。

「パセリ。」とりあえず呟いてみる。パセリと漠然とした夢しか見ない駄目な若者の代表が対面する部屋。なんてシニールな絵だろう。パセリとアリスなんて小説があったら、きつと面白いだろう。まあ、でもそんな不思議な話題に飛びついて必死に小説を書く変態はこの世にいないだろう。唯一希望がありそうな私は作文が苦手で小学校の頃の読書感想文は親に書かせていたぐらいだ。

一晩明けて朝を迎える。テンプレートのような”おなか痛いから学校を休む”という理由で溺愛する娘を簡単に休ませてしまう私の家族は子供との付き合い方というものはき違えているんじゃないかと思う。

ベッドの中に潜っていると、ベッドはとても不思議だと思った。深く深く自分の中に潜り込む作用を持っている。その自分の中へ潜っていつて見つけたもの。それは、結局世の中は希望なんてない。ということ。ゆっくりと死んでいくだけなのだ。上手く誤魔化して自分に”幸せ”という催眠をかけるんだ。私はどこへ行く。多分、選ぼうと思えばどこにでも行ける。ある程度なら。そのある程度でさえも膨大な数の選択なのだ。だが、そのどこへでも行けるという事実こそがどこにも行けない理由なのだ。私たちはそうやって迷ってる間にも死に近づいている。過去が追いかけてくる。ああ、結局私が生まれたことなんて意味はないんじゃないのかなあ。意味をつけようと思えばいくらでもつけられるけど。

その後一週間休んだ。さすがにこれは自分でも良くないなと思った。もう軽い登校拒否だ。親も若干気にして声をかけるようになってきた。

そんな日の午後に健一がお見舞いにきて

「アリス、そろそろ学校に戻ってきたらいいんじゃない。誰しも辛いことや、悲しいことはあるけどさ。やっぱりそれを乗り越えなきゃいけないよ。悲しいんだったらいつでも相談に乗るからさ。こ

のままずっと休んでたら留年しちゃうよ。」

さすがに留年は嫌だなあ。と思いつつ「私の人生ね。別にやりた
いこともやるべきこともないんだ。ただ、何かはやりたいの。もし
かしたら何かの才能はあるのかもしれないし。ねえ、私はどうした
らいいんだろう。」

健一は「とりあえず勉強して大学に入って、それからゆっくり決
めればいい。可能性や知識も広がっていくだろうし」と言い残し彼
女と会うために帰っていった。

なんで日本なんていう狭い地獄で生きなければいけないのだろう。
世界には何か様々なキラキラしたものが落ちているのではないか。
そこは決して何でもあるわけではないけれど、きっと何かがある。

「旅に出たい。」呟いてみる。

どこか知らない国へ行きたい。

不思議な国へ。私を待っているキラキラしたものがある国へ。

お金を集めて。大学へ行くお金をそちらに回してもいい。語学を
勉強しなきゃ。私が住んでいるこの国には何でもあるが希望だけが
唯一ない。暖かさとかそういうものが失われた冷たい国だ。私は兎
を追いかけて不思議の国へ行かなければいけない。うん。「割と悪
くないかもしれない」先ほどより少し大きな声で言ってみる。「悪
くはないわ」

そう考えると私は言葉にできない興奮に包まれているのに気づいた。
何故だか知らないがそれがとても嬉しくて涙がこぼれてきた。

とりあえず行きたい国を回ってみよう。これからいろいろ大変に
なるが頑張ろう。処刑されそうになっても、背が縮んだとしても、
トランプが喋ったって大丈夫。だって私はアリスだもの。

私は早速素敵な建造物が並ぶ北欧の地のパンフレットを開いた。

そして、窓辺に置かれたパセリはようやく芽を出して黄金色に輝く太陽の光を浴びていた。

(後書き)

知り合いから「パセリとアリス」というタイトルで小説を書いてと言われ書かせていただきました。

アリスはの心情描写はそれなりに描けましたが、パセリはチヨイ役でしたね。パセリの花言葉は「役に立つ知識」「お祭り気分」「勝利」「祝祭」「祝宴」

この辺を絡めて描写したりもしました。最後にはほんの少し芽を出しました。まあ、もちろん枯れる可能性もあるんだけど。

アリスがこれからどうなるかは、想像におまかせ、アッコにでませ。

幸せになるとは限りません。この小説ではハッピーエンドっぽいですが。

僕ら時間があっってお金がある程度好きに使える日本人。いったい何人の人がパセリを咲かせられるんでしょうか。

何か書いてほしいテーマ、タイトル。こんなキャラでこんな小説書いて！っていうのがございましたらどんどん言っていただければありがたいです。

連載小説も始めて行くこうかと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9230h/>

パセリとアリス

2010年12月2日15時24分発行